「北の大地に医療の場を求めた会員たち」を企画するにあたって

常任理事・情報広報部長
山　科　賢　児

今回の特集羆熊通信には「北海道外で医師となり、その後道外でしばらく臨床または研究に携わった後、何らかのきっかけで北海道に生活の場を構え、北海道内で医療、医学に従事している会員」から寄稿していただきました。

北海道の風土は、開放的で、鷹揚で、風習にとらわれないと一般的に言われますが、それなりの「しがらみ」がない訳ではありません。またどの社会もそうですが、医学・医療の分野も学閥の存在、医局、先輩後輩の人間関係が地域医療の実情に影響を与えています。北海道は人的交流が案外少ないこともあり、そのような環境下で長年生活したり、仕事をしたりしていると、見えるものも見えなくなったりすることもあります。

北海道での医療がそれほど長くない会員は、むしろ北海道の医療事情の良い面、悪い面ついて、より敏感、的確に感じられることがあるのでないでしょうか。北海道医報を通じて、日常感じられた点を発信していただければ北海道医師会会員にとって有意義であると考えます。そこには今我々が抱えている医師不足、医師偏在といった医療問題の解決のヒントが隠されているかもしれません。

近年、人々の職業への倫理観が変化する一方、日本の経済力の衰退とともに社会の雇用形態も激変しています。丁度そのような時に新医師臨床研修制度が始まり、医療業界の人事も一変しました。

先日の臨時代議員会で北海道の医師不足、偏在の問題が取り上げられ質疑が交わされましたが、これといった根本的解決策はないのが現状です。だからと言って手をこまねいていることもできません。まず思いつくことから始めれば、何らかの解決策が見える時が来るのではないでしょうか。

今回の原稿執筆依頼した際、お願いしたのは以下の項目です。

- なぜ北海道に仕事、生活の場を求めたのか
- 北海道の医療環境について、良いところ、驚くこと、特殊と思われることについて
- 医師として考える医療体制の改善すべき点、北海道の医療事情改革へのアイデア、特に医師不足、医師偏在解決への提案を
- 一個人、家庭人、道民としてみた北海道の魅力、また子弟の教育などの抱えている悩みなどを

不定期ではありますが、今後この企画は続きます。またこのような機会を通じて会員の皆様には、北海道医師会に「活」を入れていただければと切望しています。

北海道での勤務

岩内古宇郡医師会
北海道社会事業協会岩内病院
玉　田　善　雄

1．なぜ北海道に着任したか

ここ岩内に来て約１年半になります。15年余り大阪で整形外科クリニックを開業していました。

学生時代から過疎地での勤務を考えていたこと、両親、子供がいないことなどの条件がある程度そろい、一番の過疎地である北海道に決め、何かの雑誌に医師募集の記事を見て、道の医師確保推進室に連絡しました。

診療所勤務とばかり思っておりましたが、病院勤務を依頼され、あわてて、大阪で、救急や、麻酔、手術と極短期間でしたが研修させていただき、何とか去年の４月に赴任しました。

クリニックの後継者を見つけるのに時間がかかり、大変でした。

４、５ヵ所の勤務地を紹介され、ニセコに近い（時々ニセコ、富良野にスキーに来ていました）ことより岩内に決めました。

2．医師不足について

医師だけでなく人口が減っています。魅力がないので人が離れていきます。

北海道の産業は、農業、漁業、観光、公共事業でしょうか。人を引きつける町づくりが必要です。簡単ではありませんが、このままでは地方は崩壊です。町が繁栄したら医師も自然と集まるのではないでしょうか。

研修医制度の負の面が地方の医師不足の原因ですので、地方の努力の問題ではなく、国の制度を変えて取り組んでいただかなくては解決は困難と思います。

ただ、私のように、自然に恵まれた北海道で、数年なら働いてもよいと考えている医師は結構たくさんいるでしょう（特に、夏の快適さは天国です）。そういう医師をどのように着任まで持ってくるかです。私みたいな変わり者がたくさんいればよいのですが。いろいろな生き方があるので試されたらよいと思います。

3．その他思うこと

ここにきてまだ日が浅いのですが、こちらの人は、おっとりしています。悪く言えば、危機感が薄いようです。“何とかしてやる”より“何とかなるだろう”

の感じがします。日本全部そうかもしれませんが。
　でも、しっかりやっていきましょう。

中標津赴任３年目

根室市外三郡医師会
町立中標津病院
成　澤　研一郎

１．なぜ北海道に生活の場を求めたのか？

　赴任する10年前頃から学会、スキー、フライフィッシングなどで年に２、３回北海道を訪れているうちに北海道、特に道東に住みたくなりました。もともと、暑いところが苦手なこと、人混みや雑踏が好きじゃないこと、なども理由のひとつです。

２．北海道の医療環境について、良いところ、驚くこと、特殊と思われること

　道内では当院にしか勤務していませんので、当院のことしか分かりませんが、当院の医療環境は大変良く、申し分ありません！

　ただし、この文章をみて、当院勤務を考えられる方がもしいらしたら、ぜひ個人的にご相談ください。紙面ではとても表現できないような良いことを、いっぱい追加ご報告します!!

３．北海道の医療事情改善へのアイデア、特に医師偏在、医師不足解決への対策

　医師不足している地域のような場所に住みたい医師をうまく捜しだすこと、医師がなぜ、そのような地域に赴任したくないかの客観的評価、分析を各地域、各病院ごとに十分に行い、それに対する対策を立てること、でしょうか。

　赴任したくない理由が具体的になんであるのか？

　子供の教育環境なのか、持ち家が札幌等の他の都市にあるからなのか、高齢の親の世話をしなければならないのか、空港から近い遠いなど交通の便なのか、とにかく田舎暮らしが嫌いなのか、給与の問題なのか、救急搬送をすべて受けなければいけない過酷な全科当直を何歳になっても頻繁に強いられる等の雇用条件なのか、一生懸命働いても何のインセンティブもない等の待遇面なのか等をまず分析することが重要だと考えます。

　あとは、医師会や行政だけで行うよりも、民間の医師斡旋業者に業務委託や業務提携するのも有力な手段かと思います。やはり民間業者は、その情報収集能力や分析能力は、経費がかかってもそれだけの価値があると思います。

４．医師としてではなく一個人、家庭人、道民として見た北海道の魅力、日常生活で満足な点、不満な点、また子弟の教育などの抱えている悩みなど

　当地（中標津町）に関してですが、やはり、暑くないことが私にとって一番です。自然に囲まれた今の生活環境には大変満足しております。しかも空港が町内にあり、千歳便３往復、羽田便１往復していますが、これは自分が生活する上でも非常に便利です。不満な点は、牛糞を畑にまいたあとの悪臭です。町中ものすごいにおいが漂い、本当に苦痛です。これに関しては行政の協力で何とか改善を希望します。

　子供たちは遠く離れた都市で生活していますので、教育環境はそれなりに充足されていますが、自分自身が子供たちの生活や教育に密接にかかわれないことが悩みです。

北の大地の大きな可能性

室蘭市医師会
医療法人北海道家庭医療学センター　理事長
本輪西ファミリークリニック　院長
草　場　鉄　周

私は福岡に生まれ育ち、大学進学で京都に進み、その後、医師としての第一歩を北海道で歩み始めた。それゆえ、北海道外からの目といっても、長年道外で働き、今道内で活躍される医師とはやや視点が異なると思う。ただ、北海道での医師生活も13年目を迎え、こうした経歴を持つ若手医師の視点も何かのお役に立つかと思い、筆を執った。

冒頭に掲げたように、北海道は九州人からは未知の世界そのものである。高校の修学旅行がスキー旅行という人間にとって、冬期は寒く雪に覆われる土地での生活は想像しづらいのだが、これは関西の人間、つまり私の妻にとってもおおむね同じであった。ただ、いざ室蘭での研修・診療を開始して生活し始めると、食材の新鮮さとおいしさには驚くことも多く、ちょっとしたドライブで登別温泉や洞爺湖、ニセコなどの素晴らしい自然環境にふれることができるのは大きな喜びであった。結婚当初はドライブや観光地巡り、子供が産まれてからは自然公園や雪遊びなど、その気になれば生活を潤してくれるイベントには事欠かない。ただ、良い季節が短く、集中しすぎるきらいはあったが。今ではむしろ、帰京したときに体験する関西や九州の暑さや人／車の多さなどと比べると、住みやすさを感じることの方が増えてきた気がしている。

まず生活から入ったが、次に医師としての北海道を考えてみる。私は室蘭の日鋼記念病院で卒後臨床研修を受け、その後、家庭医療専門研修として、十勝・更別村、岐阜、沖縄、室蘭で診療所や病院の研修を２年間にわたって受け、その後は室蘭のクリニックの家庭医として診療を続けている。「なぜ北海道か？」と言われると、室蘭に北海道家庭医療学センターがあり、そこで家庭医を養成する活動を1996年から先駆的に実践していたからとしか言いようがない。医学生時代のクリニック見学が初めての北海道であった。そのため、雪の多さや冬期の寒さについては無論不安があったが、それ以上に北海道で家庭医として学び成長したいという思いが勝っており、津軽海峡を越えるのにちゅうちょしなかった。

北海道は日常生活でも感じることだが、地縁血縁などで人間関係に束縛される傾向が薄いと思う。つまり、医師の世界で言えば、医局や出身大学に関する排他性は本州よりも薄い印象がある。遠く京都から「家庭医療」というなじみのない分野を学ぼうとやってきた研修医に対し、病院で指導してくれた各科専門医は実に優しかったし、いろいろと手ほどきしてくれた。日本の各地で家庭医療研修に励む方の話を聞くが、低い評価で心が傷つくことも少なからず見受けられるようだ。きっと、明治の開拓に合わせて日本各地から人が集まり作られた文化という開放性がその基盤にあるのだと思う。これは、北海道の持つ特質であり、将来への大きな利点だと思う。

また、神経内科の医師が少なく、多くの神経内科領域の疾患を脳外科医の医師が診察していること、血液、膠原病や内分泌の専門医が少ない一方で、消化器科の医師が非常に多いことなどが、関西の医療と比べてやや違和感があった。今ではすっかり慣れているが、もう少し、多様な科の医師が増えてくれれば、地域医療での医療の多様性と専門性が高まるのではと家庭医の立場で思うこともある。

最後に、北海道の医師偏在の問題であるが、これは３種類の医師の協働がすべてだと思う。①家庭医／プライマリ・ケア医、②総合内科医、③各科専門医の３者である。

帯広、釧路などの中核都市へのセンター病院設置や複数の総合病院協力体制で、③の各科専門医が５～10名体制で診療できる環境を構築し、高度専門医療を余裕を持って提供できるようにし、多くの道民が札幌や旭川に治療に出かける必要のない状況とする。そして、小規模の都市や中核町などの病院は②の総合内科医といくつか各科専門医が協力して、common diseaseの入院管理や２次救急に完結的に対応できる体制を構築する。最後に、全町村の診療所（有床含む）に対して家庭医を２～３名配置し、日常のcommon disease（内科系、外科系、精神科系などの領域にこだわらず全方位的な健康問題）の外来および地域包括ケア（地域全体の健康を高める活動）を展開し、医療の下支えを行う。

この３層構造が連携をしっかり保つことができれば、多くの医療問題は自然と解決されるだろう。無論、具体的な展開になると、地域性や過去の経緯などで簡単ではないことは重々承知しているが、少なくともあらゆる政策をこのシステム構築に傾けてじわりじわりと動いていくことが、医師会をはじめ関係機関には強く求められると思う。

私はこうした理想的システムを、しがらみを越えて日本で初めて構築できるのは北海道しかないと確信している。「21世紀の新たな医療は北海道にあり」と胸を張れる北海道でありたい。

羆熊通信への一私見

帯広市医師会
センチネルクリニック　理事長
田　中　　卓

中国地方の指定都市より道東のこの地に家族で移り住んで、もう15年、開業して12年になります。羆熊通信への原稿ということで、「宛先」はほぼ自明ですので、「差出人」についての個人情報を述べますと、生まれは北九州ですが、父の転勤に伴い、神奈川の座間、海老名、九州の門司、熊本、大学受験のときは広島におりました。結局、故郷というものがありませんので、広島大学の医局には愛着があったものの、仕事の内容次第では、広島にこだわる気持ちもありませんでした。広島大学昭和59年卒、原医研・外科部門に直接入局卒後27年になります。

私の出身教室は、胃がん、食道がんや乳がんなど固形がんの手術療法や制がん剤治療、免疫療法の研究をテーマとしておりました。外科医としての基礎研修を終わり大学院生として医局に戻ることが決まった時、入局時の主任教授・服部孝雄先生より、私の研究者としての基幹を臨床統計にするよう指示され、原医研・生物統計部門に出向。専門的な臨床統計学研究とともに、医局の臨床試験のデザインや治療効果評価など臨床統計の知識をサポートしました。コンピュータで医局レベルの臨床情報を管理しなければならないという時代の要請もあり、生物統計部門の助手時代には、乳がん検診システムの構築、乳腺デジタル画像の自動診断、地域がん登録との連携などの発案もしておりました。

一方では、いろいろな科のトップから院生の先生方の研究のお手伝いもいたしました。

種々のフェーズの臨床研究にかかわったことから、実際の臨床現場で活用できるいろいろな視点や発想があることに気付いておりました。私のような人間からすると、大学での数理的側面の強い統計学研究も、実学的傾向の臨床疫学（EBMという言葉はまだ一般的でありませんでした）も、町村レベルの地域医療（地域の臨床システム構築とか）も専門性の強い外科臨床（乳腺温存術も鏡視下手術も萌芽期であります）も、いずれも“それなりの”価値があり、人生としてどれもあり、と思っておりました。

では、何がきっかけで、北海道に来ることになったのか？というと、「縁があり、十勝にやってきて、開業に至りました」と自己紹介時に端折って簡単に言ってきましたが、いろいろな職業分化のポテンシャルをまだ保持している者に、その時の教授が人心掌握の失敗をしただけのことです（政治家と同じですが、相手が本気のときの約束事を破ってはいけませんね）。

母校所在地が出身地でないため、家内も他県出身者であったこと、子供がお受験に入る直前であったこと、道東出身の医局の先輩から数度北海道での数週間から半年のアルバイトをさせられて、家族も私も、道東の土地柄が大変気に入っていたことなどが重なっての“縁”でした。

さて、いただいたお題は、『医師確保対策』で、道外出身者がいかにして道内での医療従事に至ったかの要因例示が目的の一つと思量いたします。

私見として申し上げますと、『課題の構造をきちんと問い立て、解くべき問題項を定義し、質の良い基礎情報を収集』することで大抵は道筋が通ると思います。

生徒、学生時代の課題・問題では、「解く」能力が評価の対象となりますが、実際現場では、問題をきちんと立てる、ことがすべてだと思います。“きちんと定義された問題”は、その定義自体から、有限時間で、妥当コスト的に、解けるかどうか、すら“自明”です。

「問題の解決法がみつからない」のではなく、解ける形で問題が十分定義されていないと考えます。

現在の政治の課題と同じで、アリバイ作りの公開ヒアリングを行っても、“問題解決”はなされないでしょう。というより、出てくるものは、ほとんど想定内のもののはずなのです。

ながながと私の履歴を書きましたのは、医師が北海道に来るのは、たまたまの縁でしかない、ということを言いたいからでしたが、私にとっては必然のように感じはするものの、出身地を離れて移住を考える医師が北海道を選ぶかどうかはかなり偶然の要素が大ではないでしょうか。

提言としては、偶然を必然に変えようというかなり大変な努力（ほぼ無謀な）よりも、北海道独自の問題意識の共通コンセンサスを作る、ということです。そちらのほうが、頑健な問題解決システムにつながると思います。

具体的には、３・11以後の時代として、十分オープンな議論の場を設けるというものです。少なくとも今は、日本医師会のレベルから郡市医師会レベル、どの層でもそのような安定した議論の場がありませんので。

（なお、補足内容をブログ http://blog.m3.com/kai704 に書いておりますので、ご関心のある方はご参照くださいませ。）

“しきい”をかえる

帯広市医師会
帯広市夜間急病センター　所長
金　澤　秀　人

十勝へ来た理由

このたびは、北海道医報の羆熊通信より、道外から来た医師に、その移り住んだきっかけや、道外出身者から見た道内の医療事情についてなど、所感を述べる機会をいただきました。

十勝に移り住んだきっかけは、医学生時代の夏休みを使って、北海道へ旅行しながら医療体験をしようと思ったことに始まりました。

当時、母校滋賀医大のクラブ顧問だった北大医学部出身の渡部真也教授（公衆衛生学）にご紹介をいただいて、上士幌の阿部外科病院（廃院）で１週間寄宿させてもらったのです。そこでお手伝いや掃除など雑用をしながら、山へ登ったりあちこち出歩いて過ごしました。

このとき、十勝の人たちのおおらかさにふれ、乾いて澄み切った空、おいしい食材などを堪能して、これが大そう気に入って、一人前になったら必ず十勝へ戻ってこようとの思いが募りました。こうして医師となった後、７年目を契機に北海道へ渡ったのです。

十勝に来て気付いたこと

棲家は上士幌と同じ十勝平野の中核都市帯広へ決めました。それまでは京都や東京などの大都会生活しか知らなかったので、帯広で暮らし始めてみると、まずその都市規模のコンパクトさに感心しました。

通勤時間は30分以内、学校や買い物、役場の用事など、自宅から徒歩範囲にみんなあります。これだけでも便利ですが、さらに渋滞や満員列車などまったく無縁、道路も歩道も広く歩きやすいし、住宅や土地も広い割に手ごろで、すぐ手に入りました。

車で走ってみれば帯広市街を横断するのに30分はかからない中で、図書館、大病院、ほか主だった公共施設も収まっている。とくに帯広は知らない人も多いでしょうが、都市公園比率が日本で最も高い、西欧並みの緑化都市なのです。

汚れた空気や臭気のする水道水、騒音などから一転して、清涼な空気とおいしい水、静かな住環境へと変わり、もうここを動く気はいたしません。

で、肝心の医療事情はどうかといえば、帯広を見る限りでは、立派な大病院がいくつかあって（救急告示病院で７ヵ所）、適当な数の開業診療所とあいまって、これまたコンパクトに収まっている印象があります。

ただその病院の機能を支える人的状況がどうかといえば、拠点病院でさえ主要診療科を支える医師の確保もままならぬ状況で、その不足を補うため札幌だけでなく、遠く本州から航空券と宿泊を用意して非常勤医師を呼ぶのが普通に行われ、これには最初驚きました。北海道ならではの特殊性です。

さらに町村など郡部の状況はといえば、これはもっと過酷な状況で、主要診療科を維持するどころか医師確保や定着の問題に終始行政が振り回されてしまいます。

私用で町村へ訪ねる機会がありますが、そこでときおり目にする光景が、統廃合にあって使われなくなった医療施設、フロアや医療機器などの設備です。

かつて少なくない予算を投じたのに、無駄になったこれらの光景はいま町村にとどまらず、地方中核都市の帯広にも押し寄せてきており、これは帯広に私がやってきた10数年前に比べると、明らかに悪化している印象を受けます。

医師確保のとりくみ

現行の医師養成や医師配分のシステムと、地域ごとの医療ニーズに配慮した適正な医療行政の施行に、かなりの修正を施さなければならないと思わざるを得ません。では具体的になにが問題で、それをどうすればいいのでしょうか。そのことに関して、今なにかどこかで行われていることがあるのでしょうか。

旭川医大ではこの地方の医師不足、定着不足解消をねらって、あらたな入学定員増加分40名を、すべて地域出身者優先のAO入試枠にあてるという試みを始めました。これは希望をもたせてくれる画期的な試行と思います。卒後医師の動向に注目したいものです。

はからずも、今年高校３年になるわが子が、この枠を利用してぜひ旭川医大で学びたいと意気込んでいましたが、受験資格に評定平均が4.3以上必要でした。これは高校３年間ほぼオール５でなければムリ？なほど敷居が高いものですが、幸い本年度から4.0に下がり、不肖のわが子も受験可能となりました。こういった“しきい”をかえることに、ひとつのヒントがあるのではないでしょうか。

そもそも地域医療対策の先例として、30年前に自治医大が立ち上げられました。選抜で工夫がなされ、出身都道府県ごと２名の枠をあて、卒後９年間、出身都道府県の公的医療機関勤務を義務付けたもので、実際医師の地方勤務定着率は95％だということです。

ところがこの枠が問題で、東京都が２名なら、北

海道も２名です。この硬直的な配分規制を緩和し、より細かな医療圏での医師数を反映した方法へ、まず転換するべきかと考えますが、いかがなものでしょうか。

また北海道の行っている公的な対策として、古くから地域医療振興財団はじめいくつか事業があります。これらはもっぱら医師個人の申し出を待つスタンスであり、おのずと限界がありましょう。そこで注目される試みが、仙台厚生病院で進めている構想です。

仙台厚生病院設立母体の厚生会が中心となって医学部を設立するというもので、目黒理事長はその設立趣旨の中で、“研究、教育は大学の役割である一方、東北の医師不足解消のため、臨床第一主義の医師を育てる”と述べ、また定員でも東北出身者で過半をまかない、自治医大のような奨励金制度をもうけ、学費負担の軽減と地方定着を図ると、明瞭な方針をうたっています。

今後、文部科学省や厚生労働省が規制との狭間で、この“しきい”をどうかえてくるのか、注目されます。

やり直せる工夫も

とにかく、地域にあった適切な医療インフラの提供には、地域医療の現実にあった教育をうけた医師の確保や育成まで踏み込まざるを得ないと思われ、その前提において、初めて安定した実のある医療計画が立ち、無駄を防ぐこともできるというものです。貴重な予算を効果的に医療サービスへ導くため、仙台の試みに学ぶところはおおいにあると思います。

ちなみに私の暮らす道東では、３つの三次医療圏がありながら、大学病院はひとつもありません。人口規模から見たら致し方ない現実かもしれませんが、その三次医療圏を支える拠点病院の役割に、地域で働く意欲のある人を育てる医育機関を新たに加えるべきと思いますが、いかかでしょうか。

最後にもうひとこと。かつて規制緩和をスローガンに一世を風靡した小泉政権時代に、“やり直しのきく社会”というものがありました。

私も建築士でありながら、あらためて医師になったやり直し人間です。当初は学士入学できる大学を探しましたが、２、３の超難関国公立系に限られ、しかも年間合わせて数名程度の合格と分かり、結局高校生たちと一緒の一般受験をいたしました。

あれから20余年、学士入学制度を取り入れる国公立系医学部は20を超えるまでに増え、“やり直しのきく社会”へとわずかに進展したようではあります。

ただせっかくのこの制度を、単に数合わせの医師数確保に終わらせてしまうのではなく、地域医療の担い手を育てるという明確な戦略で、とらえなおしてほしいと私は思います。

現在、全国各大学の学士入学枠は５名前後と一律です。これを地方の実情に合わせ、もっと柔軟に配分しまた、いまだに厳しいままの受験資格を、学士取得者以上などに変えて門戸を広げ、その分地域医療への貢献という観点からの選抜を重視する、いわば“しきい”のかけ方をかえるような緩和を、担当省庁でぜひご検討願いたいと思うものです。

社会人から再度医師をめざそうとする彼らには、地域や僻地医療に貢献したいと、明瞭な目的意識を持つ人が少なくないと聞きます。そのような人が再びやり直せる機会を工夫すれば、彼らには高い目的意識を発揮して、困窮した地域医療打開の尖兵として活躍していただけると確信しています。

人を掘り起こし地域で育てる、皆様はどのようにお考えでしょうか。長々とおつきあいいただきまして、ありがとうございました。

野鳥（とり）が変えた人生

帯広市医師会
帯広厚生病院
新　　智　文

「なんて広くて青い空なんだ」思わず声を出し、僕は確信した。帯広空港に降り立った僕たちの目の前に現れたのは、とてつもなく広大で澄み切った真っ青な空。住みなれた東京から引っ越してきた片道切符の目的地は、まさしくここなのだと改めて自覚した。すがすがしい気持ちが、新たな生活への不安を吹き飛ばしてくれている。

平成14年６月25日、妻と当時２歳の長男を連れて、この十勝の自然と共生するために帯広に移住してきたのだ。僕の人生における価値観は変わった。東京では高層ビルに埋もれて、昼間の光を太陽のそれとは感じない。何かがおかしい。これからの人生、何を基準に歩んでいくべきなのかと考えてきた。そして、それが間違いではないことを、この青空が再確認させてくれたのだ。

平成９年２月、東京港野鳥公園に僕たちはいた。羽田空港の目と鼻の先に野鳥が集まる公園の存在を、僕はその日初めて知った。しながわ水族館を見終えた後に地図で見つけた野鳥公園、こんなところに野鳥が来るのだろうかと半信半疑で訪れた。入場料300円、何だかだまされるのだろうかと思いつつ、暇つぶしのつもりで中に入った。首から双眼鏡をぶ

ら下げて中年の男性や初老の夫婦が歩いている。その足は硬いアスファルトから抜け出し、都心では少なくなった土の上を踏みしめていた。周りに植えられた樹木や草花は、自然を模造しているものの、東京の雑踏の中での生活に癒しを与えてくれていた。２階建ての建物の奥はガラス張りで、東京湾の片隅につくられた人工の池を一望することができる。潮の満ち引きにより干潟が出現し、カモメやチドリがえさをついばんでいる。備え付けのフィールドスコープの使い方を覚え、目標物を20倍の大きさで捕らえることに、いつしか入場料300円の価値が分かり始めていた。

しばらくして、僕たちのフィールドスコープはホバーリングするカワセミにピントを合わせた。空中で停止するその姿は、青・橙・緑の光のコントラストとなって、僕にまばたきを忘れさせた。これほど美しいものがレンズの向こうに実在するのだと強く意識しなければ、まるで夢の世界だと錯覚してしまいそうである。次の瞬間、水中に向って真っ逆さまにダイブ。そして体の割に大きなくちばしの先には魚が捕らえられ、近くの杭の上にとまり一気に飲み込んだ。あっという間の出来事であった。一部始終を目の当たりにし、僕たちは、その美しさと生き物の生きる姿に感動したと同時に、二人に共通の価値観が芽生えたことを感じていた。

日本で見られる野鳥が約450種類載っている「フィールドガイド」という図鑑がある。僕たちは早速これを購入した。野鳥の絵が描いてあり、そこに矢印が付いている。ある鳥にはくちばしに、別の鳥には羽の一部に、別のものには頭の赤いところに矢印が付いている。これは、その鳥の特徴あるところに付いていて、その鳥だと確認するのに都合がいい。初めてその鳥だと確認できた日付を、その本の脇にメモをする。ヒヨドリ、シジュウカラ、カワラヒワ、ムクドリ…都会の住宅街、自由が丘のマンションのベランダからも図鑑と同じ野鳥が観察できることを知った。驚きである。スズメとハトとカラスしかいないと思っていた都会の住宅街にもいるではないか。灯台下暗し、見ていないだけである。感じていないだけである。

大学病院で臨床と研究の日々を送りながら、野鳥が教えてくれる何かをつかみたくて、月に２日の休日をそれに当てた。

土曜日の夜９時、梅酒を一杯飲み干すとあっという間に眠りについた。夜中の２時に出発である。真夜中の環状７号線を北に向け、途中コンビニで買い出しをする。幹線道路の沿道では、どこにいても懐中電灯なんて必要ない。なんで夜中にこんなに明るいのか、やはり何かがおかしい。練馬インターから関越自動車道を走ること約２時間、長野県軽井沢町に到着した。いわゆる観光が目的ではない。中軽井沢の星野温泉の駐車場に車を停め、辺りはまだ薄暗い中、野鳥の森と名がついた小高い山に入っていく。双眼鏡を首に下げ、肩にはフィールドスコープのついた重い三脚を担ぎ、もちろんポケットにはフィールドガイドである。

日の出とともに鳥たちが歌い出す。繁殖期ともなれば、オスは種々独特の音色を響かせ、お嫁さんになって下さいと鳴くのである。声だけではない、一般にオスはメスを引き付けるためにできるだけ目立つ美しい色を持つ。目立つということは、それだけ敵にも襲われやすい。しかし、必死になってメスを呼び、子孫繁栄を目指すのである。僕たちは、その自然な姿を目立たぬようこっそりと覗かせてもらうのだ。新緑の葉が揺れる。エナガの群れが追いかけっこをしている。それに続いてシジュウカラ、ゴジュウカラ、コガラたちが現れた。遠くの方で「ピーピリリ、ピーピリリ」と歌声が始まった。本当に透き通った美しい声である。都会の雑踏の中では意図も簡単に打ち消されてしまうであろうその声は、朝露の輝く森の中で共鳴し、神秘的なものさえ感じさせる。少しずつ近づいてきたが、どこにいるのか分からない。僕たちは互いの眼を見ることで、はやる気持ちを抑え、これから始まるであろう感動を待ち構えた。

「いた！　あの大きな木、右側の斜めの枝」

僕はできるだけ小さな声で妻に伝えた。橙から黄色のグラデーションが、薄緑の葉の隙間からその存在を主張している。キビタキだ。すぐに分かった。フィールドガイドの表紙になっている野鳥である。僕たちは、この野鳥と初めて出合えた喜びを握手しながら分かち合った。

日本中どこでも同じ野鳥が見られるわけではない。日本の一部の地域にしか生息しない野鳥がいる。その一つがアカコッコだ。

12月の土曜日夜10時半、僕たちは竹芝桟橋を出港する船に乗り込んだ。二等船室では、すでに貸し毛布で自分のスペースを確保した常連の釣り人たちが談笑している。初めての客は戸惑いながらも自分たちの居場所を見つけ、明日の出合いを想像しながら目を閉じた。二人とも眠れない。梅酒を持参しなかったからではない。がんばっても眠れない。船のエンジン音がこれほどまでにうるさいものだと初めて知った。寝たのか寝ないのか良くわからずに、あと30分で到着するという船内放送が鈍く響いた。

まだ真っ暗な朝５時、何とか三宅島に上陸した。大路池のバス停で降りたのは僕たちだけ。懐中電灯で足元を照らしながら、林の中を抜け、大路池のほとりに立った。待つこと１時間、樹木の葉の隙間から陽の光が数10本の斜線となって差し込んだ。明る

さが増すにつれ、霧に包まれた水面に優雅にたたずむ１羽のコハクチョウが現れた。幻想的である。ヨーロッパのおとぎ話に出てくる一風景を想像させる。このコハクチョウは北極圏のツンドラ地帯から越冬するために４千キロの長旅を終え、疲れを癒しているかのようである。しばらく眺めていると、霧が晴れだし、太陽が徐々に昇ってきた。どういう角度から光があたるのかによって、まったく見え方が変わってしまう。コハクチョウが美しく見えていることに変わりはないが、幻想的とまではいかない。

日常でも同様なことはあるのではないか。物事をどういうふうに捉えるかによって、それをありがたいことだと感じたり、当たり前だと感じたり、光のあて方、考え方次第である。水面から林に目を移した。草むらから林道にぴょんぴょんと跳ねながらえさを探している野鳥がいる。しかし、まだ薄暗い林の中を見るために、僕たちの瞳孔は十分に開いてくれていない。黒っぽい影だけが動く。邪魔にならないようにゆっくりと近づいていく。影は徐々に黒と茶色そして黄色の光となり、憧れのアカコッコであることを教えてくれた。アカコッコはこの三宅島特有の野鳥である。この島で繁殖し、その遺伝子を代々引き継いできたのである。４千キロの渡りを毎年繰り返す野鳥とその土地で一生を過ごす野鳥を見つめ、僕は、自分の一生をどこで過ごすか心の片隅で考え始めていた。

「お客様、申し訳ございません。ボンベは飛行機にお載せすることができません」

平成10年７月、僕は大きなリュックを背負い、羽田空港のカウンターにいた。これからANA411便に乗るのである。ホテルは予約していない。ボンベを諦め、リュックを預けた。機内では「日本の探鳥地ガイドー北海道ー」をめくりながら、広い大地での新たな出合いを期待し、これからの行程を考えた。レンタカーにリュックを移し、６泊７日テントの旅の始まりである。夏の道東、朝は早い。現地調達したキャンプ用のボンベでコンロに火を点けた。夏とはいえ冷え込んだ体に熱いコーヒーが浸み込んでいく。４時にはテントをたたみ、うきうきしながら行動開始。

春国岱の整備された木道で、真っ赤な喉が目に留まった。丈の高い草の上から草原一帯にさえずるノゴマである。シラルトロ湖に向かう道端では、獲物を狙うチゴハヤブサに遭遇した。初めて出合った日付と場所をフィールドガイドに記録する。これで124種類目だ。釧路湿原の砂利道を進み、釧路川に架かる橋の上にフィールドスコープをセットした。僕たちは、地肌を見せた５メートルほどの切り立った崖を見つめた。巣穴があるようだ。フィールドスコープを最大の56倍まで拡大すると、直径15センチの巣穴から黒いくちばしが見え隠れしている。ヤマセミの幼鳥だ。長野の滑津川で初めて出合って以来、最も好きな野鳥である。しばらくして親鳥が、外来種のミンクを横目に、川の中に飛び込んだ。小魚をくわえたまま巣穴めがけて滑空し、僕たちに白と黒のまだら模様を見せつけた。くちばしからくちばしへ、親から子へ、子供の成長を願う親の愛は人間もヤマセミも同じなのである。

カワセミに出合って以来、駆け抜けるように野鳥を見てきた。自分の身近に野鳥がいることが、当たり前のようになりたいと願ってきた。野鳥を見るということは、ただ物を見るということではない。大げさかも知れないが、僕たちにとっては、自分の生き方を考えることであるような気がしている。野鳥を取り巻く環境を、人間の傲慢さによって破壊していることがあるようだ。必死に生きる野鳥の姿をのぞかせてもらうことで、自分たちはどう生きていくべきなのかを教えてもらっている。僕たちは、自然の中で生かされている生き物であり、それ以上の何者でもない。

青空に包まれたまま、僕たちは、吊り橋から深い渓谷を眺めていた。帯広空港を後にし、そのまま岩内仙境に立ち寄ったのだ。いつの日も、川の流れは僕たちにさまざまなものを与えてくれている。尊い水、生命の誕生、豊かな土壌、自然を考える上での教科書である。渓谷の斜面に、生い茂る葉に隠れて動くものがある。予定外に訪れたので、双眼鏡は持ち合わせていない。周りの人には何も見えていないようである。僕たちは肉眼でじっと見つめた。そして紺から瑠璃色に輝くオオルリと久しぶりに再会したのだ。東南アジアから渡ってくる夏鳥で、軽井沢の小瀬林道でその美しさを見せてもらって以来である。オオルリの鳴き声は、ウグイス、コマドリと共に日本三鳴鳥と言われるほど美しい。美しい声、美しい言葉は人の心を温かくする。こうして僕たちは、十勝・帯広の住人として迎えられたのだった。

わが家の窓からは、これまでに36種類の野鳥が見られている。